

佐倉市岩富古墳群の分析

白 井 久美子

目 次

はじめに	497
1 岩富古墳群の概要	497
(1) 古墳群の構成と変遷	498
(2) 埋葬施設	502
(3) 周溝内土壙と単独の土壙	503
2 集落と古墳の関係	504
(1) 古墳の母集団	504
(2) 集落の造墓層	505
3 副葬品から見た特性	506
(1) 大作31号墳の馬壙と馬具	506
(2) 野中5号墳の鉄製小札をめぐって	509
(3) 飾大刀	515
(4) 土製の玉	515
4 岩富古墳群の被葬者像	517

はじめに

佐倉市岩富古墳群は、1970年代以降に行われた大規模調査の対象となった古墳群のひとつである。調査された古墳は210基におよぶ。

このように県内で広範に調査された古墳群には、成田市公津原古墳群、四街道市物井古墳群、千葉市生実・椎名崎古墳群、市原市市原古墳群、市原市草刈古墳群を挙げることができる。本稿では岩富古墳群をとりあげて、その動向と特徴を抽出することにした。

周囲を海に囲まれた房総半島は、古墳時代を通して海道から人と文物が絶え間なく流入した地域である。総武（東京湾）・常総（香取海）の2つの水域をめぐる交流圏は、海道によって他地域と結ばれ

た。古墳時代中期までは東京湾東岸が海路の要衝として発展し、ヤマト王権との関わりが顕在化している。後期になると九十九里沿岸の武射郡域にも大型古墳が築かれるようになり、下総では印旛沼東岸を中心に大型古墳が築造され、古墳時代終末期になるとさらに規模を拡大して東国最大の方墳・龍角寺岩屋古墳の出現をみる。また、上総・金鈴塚古墳のように、6世紀以降の大型前方後円墳では王族や中央の有力豪族の墓に迫る豪華な副葬品が出土した。このような特性は、ヤマト王権の東北進出を背景とした政治的・軍事的基盤としての重要性によるところが大きい。

その背景には、豊かな生産基盤をもつ在来の中堅層と共に、後期の開発に伴って急成長した新興集団の存在が欠かせない。房総の新旧中堅層が築いた後期から終末期の礎に注目したい。

1 岩富古墳群の概要

岩富遺跡群は、印旛沼に注ぐ最大の河川である鹿島川の右岸台地に立地する。台地は鹿島川支流の高崎川によっていくつかに区切られ、旧石器時代から近世に至る遺跡が存在した。1975年度から千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地建設に先立って発掘調査が開始され、その後1979年～1985年度まで継続して調査が行われた。岩富遺跡群は、六拾部・南広・栗野（Ⅰ・Ⅱ）・タルカ作・大作・立山・松向作・向原・池向・星谷津・腰巻・向山谷津・明代台・木戸場・古内の15遺跡で構成され、その規模は、南北約1.5km、東西1.2kmにおよぶ。そのうち、10遺跡に古墳があり、7遺跡で古墳時代の集落が検出された。それらは古墳時代中期から後期・終末期に営まれており、古墳群は台地上に立地し、集落は台地斜面部に営まれた



図1 総の後・終末期主要古墳と国造分布

例が目立つ。墓域と造営集落の組み合わせや推移を追うことができる点が注目されている。また、古墳群の特徴として、房総で唯一轡と鞍金具を着装した馬の埋葬土壙が発掘されたこと、下総型埴輪全盛期の後期の古墳群を含めて、埴輪が全く用いられていないことなどが挙げられている（文献19）。

本稿では、古墳群の分析を中心に、岩富古墳群造営集団の性格を考えてみたい。

（1）古墳群の構成と変遷（図2、表1・2・3）

冒頭に示したように、調査した古墳は210基にのぼる。そのうち、63基は飛鳥時代末から奈良・平安時代に継続して営まれたもので、古墳時代の造営は最大でも古墳147基と土壙113基ということになる。古墳群形成は中期前半に遡り、中期後半から終末期にかけて展開する。中期後半から後期前半に台地中央部の大作・松向作・向原支群が形成され、後期後半から終末期になると台地南東部の池向支群に造営の中心が移る。また、奈良・平安時代の小規模な方墳群は、池向支群で引き継いで形成されるほか、台地中央部の立山支群、西部の向原支群など広範囲に分布する。なお、池向支群は、さらに池向古墳群と野中古墳群に分けて調査・報告されている。

墳形の構成をみると、古墳時代終末期の7世紀中葉までは円墳が圧倒的に多く、全体の8割（79.4%）を占めている。それ以降は方墳で占められ、時期不明な例も含めると全体の7割近く（67.6%）に達している。また、前方後円墳・帆立貝型前方後円墳は終末期になるまで築かれず、池向（野中）支群に4基が集中する。前方後円墳は野中5号墳（墳丘長32.6）m）、帆立貝形前方後円墳は池向5号（38.4m）・7号（25.2m）・8号墳（33.2m）の3基と栗野I049号墳（17.9m）である。

また、終末期以降に単独の土壙が多い点も注目される。特に、栗野I遺跡には60基の土壙があり、古墳時代終末期前葉に木棺を使用して直刀・鉄鏃・玉類・錫製耳環などを副葬した3基、2段掘りで底面に溝をもつ2基を除くと、奈良・平安時代の有天井土壙が55基を占める。長軸が0.98mから2.98mの例まであり、主体は長軸2.0～2.5mで29基にのぼる。有天井土壙にはほとんど副葬品がなく、用途不明の鉄製品2例と須恵器長頸壺2点を確認できるのみである。これらの土壙は、台地の縁辺を中心に終末期前葉の古墳の周囲に築かれており、同じ集団による連続した造墓と考えられる。

墳丘規模は、上記池向5号墳の38.4mを筆頭に、池向11号墳（墳丘径37.6mの円墳）、池向3号墳（径34.6mの円墳）、池向8号墳、野中5号墳と30m以上は5基に限られ、20m以下の例が9割を占めている。このうち全体の6割にあたる10m以下の例は、63基が奈良・平安時代であることを勘案しても、20m以下の古墳が6割（59.5%）を占め、半分（45.7%）は15m以下の小規模古墳である。

本古墳群が営まれた中期から終末期の古墳の変遷は、以下のように区分している。

中期Ⅰ：房総では、前期に地域首長墓として築かれた前方後方墳が姿を消し、中小の古墳も円墳に変換する。一部に方墳が残存するが、主体は円墳である。本古墳群には大作2号墳（墳丘径10.2m）、向原1号墳（墳丘径17.2m）があり、いずれも小規模円墳である。埋葬施設は遺存しなかったが、大作2号墳では周溝から須恵器大型甗が出土している。向原1号墳を挙げたのは、周溝出土の土師器坏と管玉・滑石製白玉に拠る。常総地域を中心に石製立花・石枕など特徴的な石製品が出現する時期である。4世紀後葉～5世紀前葉。

中期Ⅱ：須恵器の波及が本格化し、鉄製武器・武具など朝鮮半島系の進取の文物を副葬する時期である。立山・星谷津・大作・松向作・向原古墳群に例があり、大作1号墳（墳丘径11.2mの円墳）では鉄剣・鉄

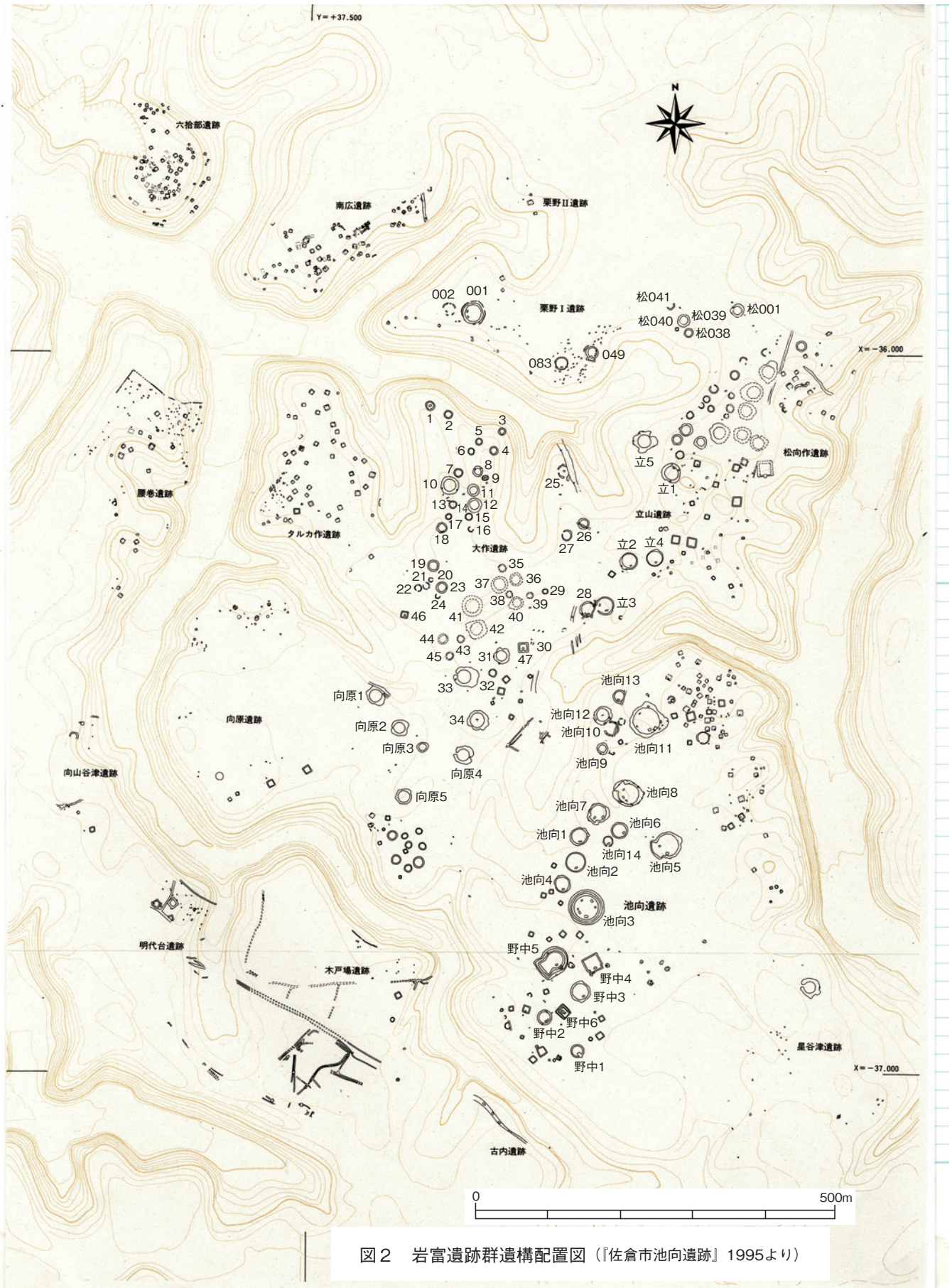


図2 岩富遺跡群遺構配置図 (『佐倉市池向遺跡』1995より)

鎌・鉄製鋤先が副葬されているが、鉄製品の副葬品は極めて少なく、甲冑の出土例もない。規模は大作34号の墳丘径21mが最大で、このほかは径8.2m～19.4mに納まり、平均は14.0mである。房総最大の前方向後円墳（富津市内裏塚古墳）をはじめ、各地域を代表する前方向後円墳が築かれる時期であるが、本古墳群に前方向後円墳は築かれていない。5世紀中葉～末葉。

後期Ⅰ：房総は全般的に前方向後円墳の規模が縮小し、造墓活動が縮小する傾向にある。内裏塚古墳群の九条塚古墳（墳丘長105m）を例外に、国造を輩出する主要古墳群の主墳は規模を減じているが、金銀装環頭大刀・金銅製帯冠・金銅装馬具などの威信財が副葬され、地域首長墓としての地位を保っている。

それらの領域内に中堅層の古墳群が急速に展開する時期で、千葉市生実・椎名崎古墳群（調査古墳307基）、市原市市原古墳群（同306基）などの例が挙げられる。この時期、前者は造出付を含む中小規模の円墳群、後者は帆立貝形を含む前方向後円墳と円墳群で構成され、鉄製馬具の保有や埴輪樹立に上位の格付けが示される。生実・椎名崎古墳群は後期以降に造墓を拡大した新興の古墳群で、岩富古墳群との共通点も見出せる。大作31号墳に馬具を伴う馬の埋葬が行われたのは、この発展期の先駆けであった。6世紀初頭～6世紀中葉に位置づけた。

後期Ⅱ：房総半島各地に再び100m級の大型前方向後円墳が現れ、中期にも増して造墓活動が活発になる。副葬品には鉄製の武器・武具類、装身具類のほか、金銀装の飾大刀・馬具、銅杯・銅鏡が威信財として加わり、副葬品が充実する。埴輪の樹立も盛んで、人物埴輪群像が最も発展する。中堅古墳群にも墳丘長30～50mの前方向後円墳が数基築かれ、円筒・形象埴輪列をもつ例も少なくないが、岩富古墳群では埴輪が用いられなかった。中小規模の古墳群は造墓域を維持し、横穴式石室・箱式石棺の構築が始まる。しかし、岩富古墳群では木棺直葬が続き、石室・石棺は築かれていない。6世紀後葉～6世紀末葉とした。

終末期Ⅰ：この時期までは大型前方向後円墳の築造が続いたが、間もなく国造級の首長墓は王族・群臣に倣って大型方墳・円墳に切り替わる。副葬品には金銀装の飾大刀・馬具などの威信財のほか飛鳥の金工品が加わり、後期Ⅱより充実する。印旛郡栄町龍角寺浅間山古墳に副葬された金銅製透彫り冠飾・金銅製毛彫り馬具は、関東各地の豪族がそれぞれ中央の有力豪族と結んで一定の領域を支配した構造を反映した例といえる。中堅古墳群の規模・構成に大きな変化はなく、有力者には馬具・飾大刀が副葬されている。

岩富古墳群でもこの段階になって松向作060（1辺15.6mの方墳）に金銅装の飾大刀、池向11号墳（径37.6mの円墳）に銀象嵌大刀が副葬される。また、野中5号墳には馬具（素環轡1組）と小札甲の付属具（籠手）が副葬された。栗野Ⅰの古墳001（径25.4の円墳）で鉄製のサルポ（鐘）が出土した点も注目できる。一方、埋葬施設にも大きな変化が見られ、箱式石棺と横穴式石室が採用されている。7世紀初頭～中葉とした。

終末期Ⅱ：地域の主要古墳に方墳とともに前方向方墳が採用されるのが総の特色である。市原市姉崎古墳群の六孫王原古墳（墳丘長46m）、我孫子市我孫子古墳群の日立精機1号墳（同48m）などがあり、中堅古墳群でも前方向後円墳に替わって20～40m級の前方向方墳が築かれている。全般に古墳は規模を縮小し、中堅古墳群では前方向後円墳への追葬が行われなくなり、前段階まで主体を占めた円墳が急速に減少し、替わって方墳が造墓の中心となる。古墳群全体が縮小傾向にあり、副葬品は質・量共に衰退する。また、横穴式石室・箱式石棺の構築はこの段階で終了する。

岩富古墳群もこの傾向に呼応しているが、前方向方墳は築かれなかった。7世紀中葉～末葉とした。

終末期Ⅲ：飛鳥時代末以降に営まれた方墳群を区別した。終末期Ⅱからほぼ間断なく造墓され、新たな造墓域を形成する例もあり、平安時代前期まで継続する。墳丘中に存在した木棺直葬系の埋葬施設は極め

表1 岩富古墳群時期別構成

報告書 No.	遺跡名/時期	前期 I	前期 II	中期 I	中期 II	後期 I	後期 II	終末期 I	終末期 II	終 III	不明	計	備考
		古墳前期		古墳中期		古墳後期		飛鳥 I~II	飛鳥III~ IV	飛鳥V~奈 良・平安			
II	立山						2	6	1	17	6	32	土壌17
	星谷津				1							1	土壌6
VII	大作			1	7	7	1		2	6	29	53	土壌20
IX	松向作				3	3	3		1		13	23	土壌4
VI	向原			1	2	2				7	9	21	
V	腰巻										5	5	
VIII	栗野 I							3		1	1	5	土壌60
XII	池向						5	14	6	24	12	61	土壌6
III	タルカ作									1		1	
IV	向山谷津										1	1	
IV	明代台									4		4	
IV	木戸場									3		3	
計		0	0	2	13	12	11	23	10	63	76	210	土壌113

表2 古墳群の構成

*時期が分かる例のみ

時期/墳形	前方後円墳	帆立貝形 前方後円墳	円墳	方墳	古墳計	単独の土壌	計
前期 I							
前期 II							
中期 I			2		2		2
中期 II			13		13		13
後期 I			12		12	3	15
後期 II			11		11		11
終末期 I	1	4	18		23	7	30
終末期 II			1	9	10	2	12
終末期 III				63	63	90	153
不明				76	76	11	87
計	1	4	57	148	210	113	323

表3 岩富古墳群の規模別構成

報告書No.	遺跡名	~10	10~15	15~20	20~25	25~30	30~35	35~40	40~45	不明	計	備考
II	立山	21	4	3	4						32	
	星谷津			1							1	
VII	大作	31	13	8	1						53	
IX	松向作	9	6	3						5	23	
VI	向原	13	4	4							21	
V	腰巻	5									5	
VIII	栗野 I	1	1	2		1					5	
XII	池向	40	3	8	3	2	3	2			61	
III	タルカ作	1									1	
IV	向山谷津									1	1	
IV	明代台	3	1								4	
IV	木戸場	3									3	
計		127	32	29	8	3	3	2	0	6	210	

て検出例が低く、方形の溝だけが残る例が多い。副葬品は少なく、棺に使用した鉄釘や刀子などに限られる。

一方、地下式構造の埋葬施設が多用され、いわゆる有天井土壙に加えて豎坑の入口部を伴う地下式横穴墓が築かれる地域もある。これらは前代から変わらぬ被葬者層によって築かれた方墳群と考えられる。

(2) 埋葬施設 (表4)

中期～後期Ⅱまで、墳丘内の埋葬施設は木棺直葬である。中期～後期Ⅰでは木棺を墳丘の中央部に配置するが、後期Ⅱになると墳丘裾部で同心円状に複数の木棺を置くようになる。木棺直葬は終末期Ⅱまで継続し、墳丘内に遺存した埋葬施設48基のうち35基を占める。終末期Ⅰになると石材を使った埋葬施設が導入され、筑波山麓産とみられる雲母片岩を使用した箱式石棺が7基、軟質砂岩の切り石を用いた石棺が1基あり、墳丘規模20m級以上の円墳・方墳や帆立貝形前方後円墳、前方後円墳に用いられており、石材使用の埋葬施設がより上位の格付けを示したといえる。

雲母片岩を使用した箱式石棺は7基の内6基が池向(野中)支群に集中している。終末期Ⅰには池向6号墳(墳丘径19.8mの円墳)・池向11号墳(径37.6mの円墳)・野中3号墳(径23.2mの円墳)・野中4号墳(墳丘長23.4mの造出し付方墳)・野中5号墳(墳丘長32.6mの前方後円墳)、栗野049号墳(墳丘長17.9mの帆立貝形前方後円墳)がある。終末期Ⅱの例は池向3号墳(墳丘径34.6mの円墳)である。また、終末期Ⅰには軟質砂岩を用いた石棺も作られており、立山1号墳(一辺11mの方墳)に確認できる。

横穴式石室も終末期Ⅰから採用されており、まず軟質砂岩切石積単室の石室が円墳と前方後円墳に1基ずつ、いずれも池向支群に見られる。池向5号墳(墳丘長38.4mの帆立貝形前方後円墳)と野中1号墳(径15.5mの円墳)である。雲母片岩を使用した横穴式石室は3基とも終末期Ⅱの方墳に用いられ、大作支群の46号墳(一辺8.2m)・47号墳(一辺5.4m)、松向作支群の060号墳(一辺15.6m)である。横穴式石室はいずれも単室構造で、砂岩切石積の2例は羨道を持たない石棺式石室様の構造である。石材使用の埋葬施設13基中10基に雲母片岩が用いられている点は、水運を利用して筑波山麓の石材を入手した印旛沼周辺の後・終末期古墳群に通有の動向といえる。

表4 岩富古墳群の埋葬施設

報告書 No.	遺跡名/ 施設	木棺 直葬	箱式石棺 (軟質砂岩)	箱式石棺 (雲母片岩)	横穴式石室 (軟質砂岩)	横穴式石室 (雲母片岩)	墳丘内 土壙	周溝内 土壙	小計	単独土壙	計	墳丘内埋葬施設 遺存せず
Ⅱ	立山	4	1					10		17(14)	32	27(18)
	星谷津							1		6	7	
Ⅶ	大作	8				2		15		20(18)	45	45(6)
Ⅸ	松向作					1		2		4(2)	7	17
Ⅵ	向原										0	21(7)
Ⅴ	腰巻										0	5(2)
Ⅷ	栗野Ⅰ	4		1				11		60(57)	76	(1)
Ⅺ	池向	23		6	2		2	32		6(4)	71	39(26)
Ⅲ	タルカ作										0	
Ⅳ	向山谷津										0	
Ⅳ	明代台										0	
Ⅳ	木戸場										0	
計		39	1	7	2	3	2	71	125	113(101)	238	155(60)

(3) 周溝内土壌と単独の土壌 (図3、表2・表4)

本古墳群では、墳丘内の埋葬施設のほかに、周溝に内接・外接する土壌が数多く検出された。1基に5、6基の周溝内土壌を伴う例も見られる。なかには池向7号墳の周溝内接土壌(第3施設)のように木棺を使用し、鉄鏃18点を出土した例や池向8号墳のように周溝内外に複数の有天井土壌を配した例も少なくない。このような墳丘に付随する土壌は後期Ⅱから増加傾向にあり、玉類や少量の鉄鏃・刀子などが副葬されているが、概して副葬品は少ない。一方、同じ墓域内に単独で作られた土壌も多く、特に栗野Ⅰ支群ではその数が60基にのぼる。造墓は飛鳥時代以降も続いているため、古墳時代と確定できる例は限られているが、ほかの支群に比べて格段に多い。単独の土壌にも栗野005・019・101土壌のように木棺を納めた例があり、玉類や錫製耳環などの装身具と大刀・鉄鏃が副葬された。

総の後・終末期古墳群には、周溝内土壌や墳丘外の単独土壌がしばしば見られるが、これほど纏まっている例はきわめて少ない。墳丘内の主たる被葬者に従属する構成員、あるいはさらに下位の人々が手厚く葬られていると解すべきであろうか。他の古墳群に比べて、より等質な集団構成を反映した墓制といえようか。周溝内土壌は71基あり、大作・松向作支群で中期Ⅱの例を確認できるが、多くは後期Ⅱ以降の例で終末期Ⅰ・Ⅱに集中する。地点別では特に池向支群に多い(表4)。池向8号墳(墳丘長33.2mの帆立貝形前方後円墳)では、周溝内に11基の土壌があり、第11施設で金銅製耳環と漆仕上げと見られる土製小玉が出土している。これらの周溝内土壌の多くは、周溝内外の壁に接して掘り込まれているため有天井土壌となっており、周辺に築かれた単独の有天井土壌にも古墳に伴うものが存在する可能性を示している。

単独の土壌は113基におよぶ。立地を見ると、終末期Ⅲの奈良・平安時代の方墳群に伴う例が多いと考えられるが、構造や規模に大きな差がなく、遺物が乏しいため時期の確定は難しい。表2では、明らかに

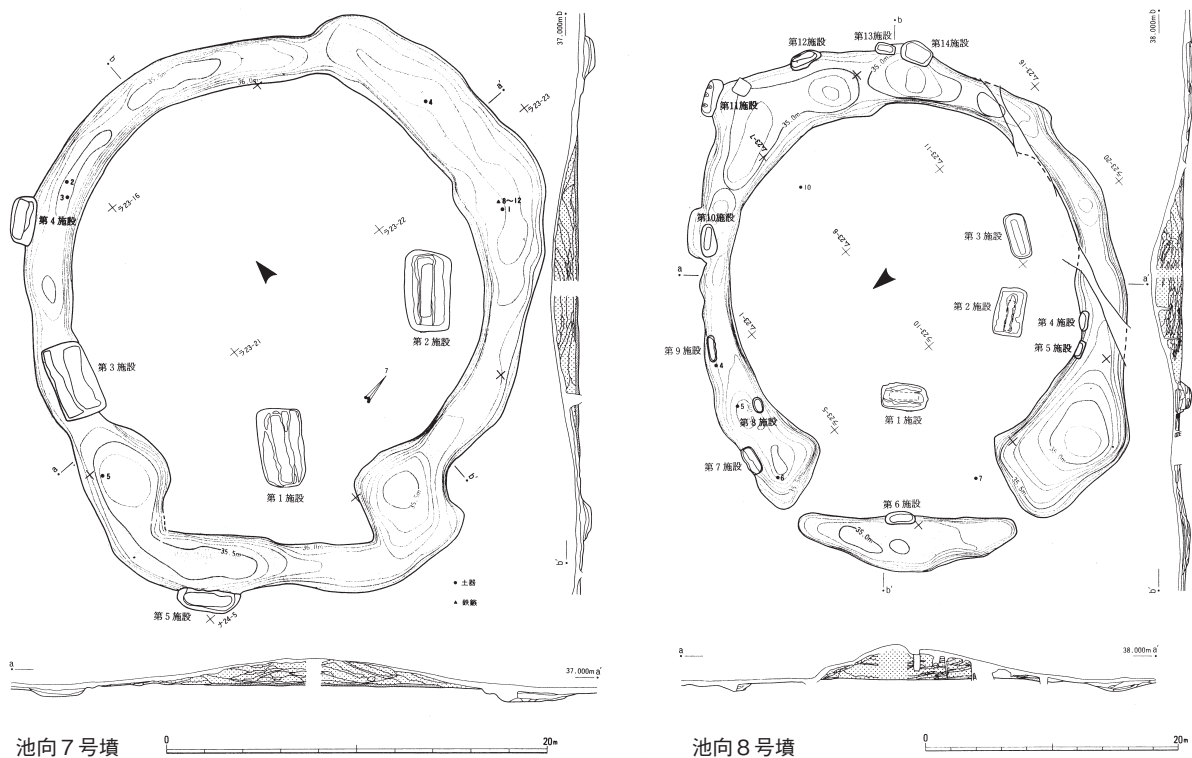


図3 墳丘内の埋葬施設と周溝土壌

古墳時代（終末期Ⅱ以前）と推定できるもの以外は終末期Ⅲ、および時期不明とした。副葬品では、大作遺跡9号土壙で、青銅製空玉9点が碧玉製管玉3・ガラス小玉15点と共に出土している例が注目に値する。

墳丘・周溝内埋葬施設は125基である（表4）。そのうち3基は終末期Ⅲの方墳に伴うので、中期Ⅰ～終末期Ⅱの古墳の埋葬施設は、墳丘・周溝内の120（大作遺跡の馬壙2基を除く）＋単独土壙12の合計で132となる。横穴式石室5基への追葬を不問にして、単純に埋葬施設の数に被葬者数とすれば、最少で132人となる。また、終末期Ⅲ（奈良・平安時代前期）の埋葬施設の数、墳丘・周溝内埋葬施設3＋単独土壙101の計で104となり、全期間の総数は236と算出される。

比較資料として、千葉市生実・椎名崎古墳群の例を見ると、前期～終末期Ⅲの309基を対象とした埋葬施設の総計は207であった。本古墳群と同様に造墓の中心は後期Ⅱ～終末期Ⅲにあり、中期Ⅰ～終末期Ⅲの古墳総数は300基である。当古墳群の埋葬施設がいかに多いか分かる。さらに、当古墳群では調査した210基の内155基に埋葬施設が遺存していなかったことを加算すると、想定される埋葬施設は393以上となる（表4）。千葉市生実・椎名崎古墳群の時期不明の古墳数41を加算しても埋葬施設の想定数は248で、 $0.82/1$ 基となり、岩富古墳群は $1.87/1$ 基で、1基あたり2.34倍の埋葬施設が築かれたことになる。

墳丘内に複数の埋葬施設を設置する例は、常総地域の後・終末期古墳に通有の形式であることから、この数値の差が周溝内土壙と単独の土壙の数に起因することは明らかで、被葬者層の厚みや広がりを示しているといえるであろう。一方、当古墳群では、石室・石棺の導入が終末期Ⅰまで行われず、木棺直葬と土壙埋葬が根強く続いた。石棺・石室への改葬や追葬の指向が希薄であったとみられる。

2 集落と古墳の関係（表1・表5）

（1）古墳の母集団

古墳群の築造は、前後に大きく2時期に分けられる。中期から後期Ⅱを主体とする前半期は、大作・松向作・向原支群が該当する。後半期は後期Ⅱから終末期Ⅲに続く立山・池向支群を主体とする造墓で、終末期Ⅱ以降に造墓を再開する大作・松向作・向原もこれに準じている（表1）。

中期の住居跡は、中期Ⅰに遡る栗野遺跡Ⅱの002堅穴を先駆けとして、タルカ作・南広・池向遺跡にある。大作遺跡の中期～後期Ⅰの古墳群を形成した集落は、小支谷を挟んで南東に位置する池向遺跡に見られる。池向遺跡では台地の中央部から東側に後期Ⅱ～終末期Ⅱの古墳群が展開し、中期Ⅱ（TK208～47期）を中心とする集落が遺跡の北東部に営まれていた。後期Ⅱには集落内に小円墳が築かれ、終末期Ⅰの池向11号墳（最大の円墳）は中期Ⅱの089号住居（TK23～47期）を切って築造された。このような例を見ると、造墓の後半期には集団内に大きな変化があった可能性がある。

後期から終末期の集落は、タルカ作・松向作・栗野・南広・池向遺跡に展開する。タルカ作遺跡は後期Ⅰ～終末期Ⅱを中心とする住居跡45棟で構成される集落で、遺跡内には奈良時代以降の小方墳1基があるほかに古墳がなく、大作・池向支群の後半期を形成した集団の居住域と考えられる。南広遺跡には南斜面に後期から終末期Ⅱの19棟の住居跡があり、隣接する栗野Ⅰ遺跡や大作遺跡の後半期古墳群の造墓に関わった可能性が高い。

一方、南広遺跡には45棟の奈良・平安時代前期の堅穴住居があり、掘立柱建物8棟や柵列を伴う新たな展開が見られ、西側に営まれた六十部遺跡で様相が一変する。集落に古墳時代の影はなく、瓦塔や「白井寺」と墨書された土師器坏や香炉蓋・仏具を模した鉢・高坏・小壺などの仏教関連遺物がまとまって出土し、

表5 集落の時期別構成

報告書 No.	遺跡名/時期	前期 I	前期 II	中期 I	中期 II	後期 I	後期 II	終末期 I	終末期 II	小計	終 III	不明	計
		古墳前期		古墳中期		古墳後期		飛鳥 I～II	飛鳥 III～IV		飛鳥V～ 奈良・平安		
II	立山										6		6
III	タルカ作				7	6	11	17	2	43	2	1	46
IV	向山谷津										1		1
IV	明代台										2		2
IV	木戸場										2		2
VII	大作												
IX	松向作					2	9	4		15			15
VI	向原							2		2	2		4
V	腰巻						2	13		15	9		24
VIII	栗野 I・II			1		1	2		1	5	6		11
X	南広				2	8	7	4		21	45		66
XI	六十部										73		73
XII	池向				17	29	2			48			48
計		0	0	1	26	46	33	40	3	149	148	1	298

表6 岩富古墳群の副葬品出土状況

遺跡/ 副葬品	大刀	飾大刀	剣・槍	鉄鏃	刀子	飾弓	馬具	腕輪	耳環			玉類			その他
									金銅	錫	鉄	琥珀・ 石製	ガラス	土製	
立山				47	6	0		2				31		1	腕輪：錫と銅
星谷津												2			
大作	8		1	64	8		1					28	95		青銅空玉9, 鋤先1, 砥石1, 釘10
松向作		1		72	2							27		1	燧金1, 釘1, 滑石円板1
向原				3								3			釘2
腰巻															
栗野 I	6			66	2				1	2		3	94		サルボ1, 釘1
池向(野中)	25	1		334	14	3	1		7	10	6	138	1710	27	小札(籠手)155, 釘8, 滑石紡 錘車2, 燧金2
計	39	2	1	586	32	3	2	2	8	12	6	232	1899	29	

* 数値は点数、飾弓・馬具は組数。* * 埋葬施設以外から出土したものは基本的に除いている。

竪穴住居と共に建てられた15棟の掘立柱建物群には仏堂と考えられる小規模な仏教関連施設もあり、居住集団の礎が造墓から仏教信仰に変わったことを示している。

(2) 集落の造墓層

古墳時代の住居跡は、中期前半の(中期 I)の5世紀中葉の例から終末期 IIの7世紀末葉の例まで約250年間に調査区内で149棟確認されている。古墳は、奈良・平安時代の例を除くと147基(A)、時期不明の方墳も除くと71基(B)である。時期不明の例が終末期 IIならば、古墳と住居跡の数がほぼ同数になる。

同時期の例を前掲の生実・椎名崎古墳群に見ると、古墳209基に対して住居跡843(時期不明の例を除く)～1037棟になり、古墳1基あたり岩富遺跡群の4～5倍(A)、少なく見積もっても2倍～2.5倍(B)の住居跡が存在した。このように、本遺跡群では集落構成員の造墓率がきわめて高いといえる。前掲のように、墳丘規模が40mを超える例はなく、20m以下のものが全体の6割を占め、被葬者には大きな格差がな

く、造墓の規制も少ない集団の特性を表している。

奈良・平安時代（終末期Ⅲ）の集落も調査区内で場所を移動して存続しており、集落域と墓域が調査区内でほぼ完結している可能性が高い。終末期Ⅲの竪穴住居跡は148棟、方墳は63～139（時期不明な方墳を含む）基で、竪穴住居と方墳の数が拮抗する可能性がさらに高まっている。ほとんどの竪穴住居の家長が小規模な方墳を築いていたことも想定できる。規模は一段と小型化し、池向遺跡の3.4mを最小に、5～6mの例が多く、立山遺跡の16.1m（3号方墳）・11m（10号方墳）のほかは10m以下である。これらの小規模方墳の被葬者にはほとんど格差がなく、また墳丘規模によって集団内の地位を示す原理が失われていたことを示しているといえるであろう。

3 副葬品から見た特性（表6・表7）

本古墳群は、奈良・平安時代の小規模な方墳群を除いて150基近い規模の古墳群であるが、保存区に係る20基の埋葬施設が調査されていないことに加えて、後世の土地利用などによって墳丘が削平され、75基の古墳で埋葬施設が失われていた。このため、副葬品の量は比較的少なく、本古墳群と生実・椎名崎古墳群を比べると飾大刀2：12、大刀39：157、鉄鏃586：1865という割合である。本稿では、以下の4点に着目して副葬品の特性を抽出することにした。

（1）大作31号墳の馬壙と馬具（図4・5）

大作31号墳には、円墳の周溝内に馬の埋葬土壙（1号土壙）があり、馬具を装着した馬体が埋葬されていた。馬の歯が銜を咬んだ状態で出土し、鞍金具が0.7mほど離れた位置にあった。轡は鉄製の内湾楕円形鏡板付轡で、銜と引手を鏡板の外側に遊環を介して連結し、銜は銜掛孔に装着された棒状の銜掛板に通している。銜掛孔は楕円形で、銜掛板が鏡板を貫いて留められている。浅く内湾する楕円形鏡板付轡の県内の出土例は、印西市吉高浅間古墳と香取市鴫崎天神台3号墳にある。吉高浅間古墳の出土例は基本的な構造は大作31号墳と同様であるが、銜掛板を鏡板に鋏留めしている点、銜掛孔が方形で、立間には吊り金具が付くところが異なる。鴫崎天神台3号墳の例は、二条線の捩引手を装着し、鏡板縁部に刻み目、吊り金具に対角線状の鋏打がある。環状雲珠や組合式十字形辻金具を伴う。同墳の形象埴輪に馬形があり、f字形鏡板付轡・鞍・障泥・鐙を装備し、尻繫には環状雲珠と3鈴杏葉が3個取り付けられている。吉高浅間古墳の鉄鏃や大作31号墳周溝内出土土器器坏によって、いずれも中期末葉の例と考えていたが、鴫崎天神台3号墳がやや先行する可能性が高く、上記の2例は後期初頭に位置づけるのが妥当であろう。

大作31号墳の轡に伴出した栗形の鞍座金具は、厚さ1mmの金銅板に蹴彫による波状列点文や小孔の装飾があり、周縁は面取りして仕上げられている。金銅製の金具で飾られた鞍を装着した馬の所有者（被葬者）は、径15.2mの小円墳に葬られたとはいえ、集団内で相当な地位にあったと考えられる。周溝に外接する土壙は2基あり、もう1基の土壙（2号土壙）も馬の埋葬が確認された1号土壙より浅いものの、ほぼ同形・同規模である。馬骨や馬具は出土していないが、ほかの周溝内土壙とは明らかに規模や形状が異なるため、馬を埋葬した土壙と考えられる。墳丘内の埋葬施設は遺っていなかったが、複数の馬埋葬土壙によって被葬者が馬利用に関連した職能の持ち主であることがうかがえる。

当地の馬文化の導入状況を見ると、富津市内裏塚古墳に埴輪を供給した木更津市畑沢埴輪窯跡で、列島の馬具導入初期に用いられた鏝轡と木芯鉄板張り輪鐙を写實的に表現した馬形埴輪が出土していることから、5世紀前半には房総の首長層に馬具を装着した馬が導入されていたことがわかる。内裏塚古墳では、

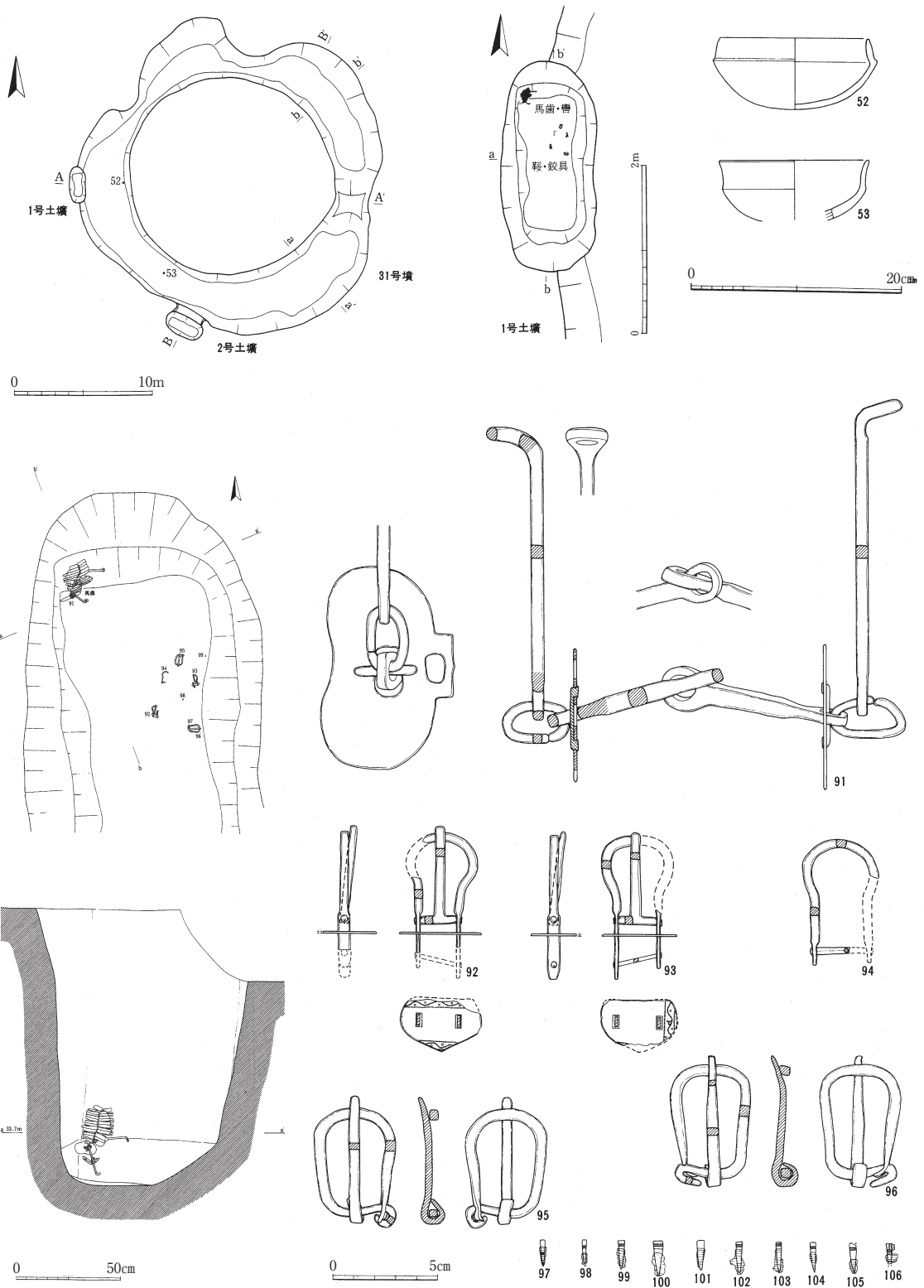


図4 大作31号墳の馬埋葬土壌と馬具

韓半島南部の東來福泉洞古墳群出土品と同工の胡籙金具が副葬され、騎馬に用いる舶載の矢入れ具をいち早く入手していた首長の存在を確認できる。しかし、5世紀から6世紀初頭の馬具副葬古墳は、木更津市鹿島塚古墳・同市矢那大原古墳・市原市西谷10号墳を含めてわずか6例にとどまり、馬形埴輪を加えても8例に過ぎない。この段階の房総には、騎馬文化が波及したとは言い難い状況である。また、そのうち3例が下総地域にあることは、馬文化導入の契機や経路を知るうえで興味深い。

馬の埋葬例は、古墳時代の馬匹生産地に見られ、渡来系馬生産集団の存在を暗示するものであるが、当地では大作31号墳のほか、四街道市荒久A03号墳（馬歯）、柏市尾井戸遺跡円墳（肩甲骨）など僅かで、周辺に展開した形跡はない。

房総では、古墳時代の馬具を出した遺跡が80例に達しているが、6世紀～7世紀も馬具の出土例は古墳の副葬品にほぼ限られており、地域の首長とその配下の中堅豪族に威儀具のひとつとして馬具が配布され、馬が配備されたとみられる。これらの分布、交通の要衝を掌握した豪族層によって後の陸路整備の基盤が形成されたことを示している。しかし、馬の生産に関わる資料は見いだせないため、馬の調達是他地域からの搬入に終始したのであろう。

(2) 野中5号墳の鉄製小札をめぐる（図6～10）

池向支群野中5号墳の片岩箱式石棺（第1施設）から155枚の鉄製小札が出土したことが報告されている（図9）。他に未報告の小札片が72点あり、長さ2cm以上9点・1.5～2cm30点・1～1.5cm22点・1cm以下11点で、2枚重ね一組を含む。

報告された小札には大きく長短3種があり、①長さ3.8～4.7cm・幅1.9～2.6cm、②長さ10cm前後・幅1.7～1.9cm、③幅2.0～2.5cmで長さが20cm以上と推定されるものである。①は湾曲するのが特徴で、頭部に丸味があり長さ4cm以下の湾曲の強いA（図9-1～3）、長さ4.5cm前後のB（5～9）、幅2cm以下のC（11～15）がある。Aは両側に3孔ずつ6孔が縦列し、下端の中央に1孔を配している。B・Cは頭部中央に縦列する2孔があり、両側中ほどに2孔、下端に3孔を配している。②には全容のわかる例がないが、33～40を見ると両端に2孔、中央両側に2孔を配し、その間中軸に1孔があり、33を中央で折り返すと長さが10cmとなる。③は、74～78、81のように片端を斜めに切り出した例があり、後掲の山梨県甲府市考古博物館構内古墳に篠籠手の類例を求めることができる。総長は23cmに及ぶと推定される（図10）。類例の中には片端が山形のものもあるが、本例では確認できない。孔は5段に配置されるようであり、本例には1/3以下の破片が多いことが分かる。報告分の残存長から③の枚数を推計すると、14枚から18枚で幅2.1cm・重ね1/3で綴じたとすれば幅19.7～24.1cmとなる。未報告の小片に③の破片が多く含まれると、綴じ幅は優に30cmを超える。

これらの小札は、報告では小札甲（挂甲）の一部とされていたが、付属具のうち籠手の可能性が最も高いと考えられる。以下、6世紀末葉～7世紀前葉の籠手

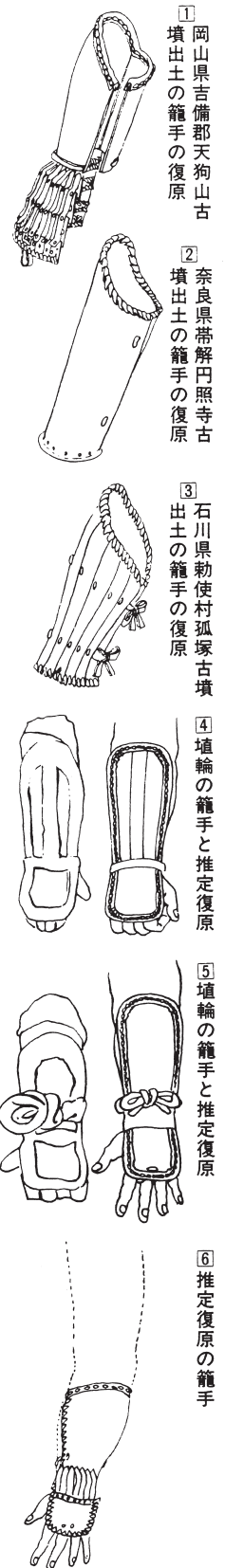


図6 古墳時代の籠手（文献6より）

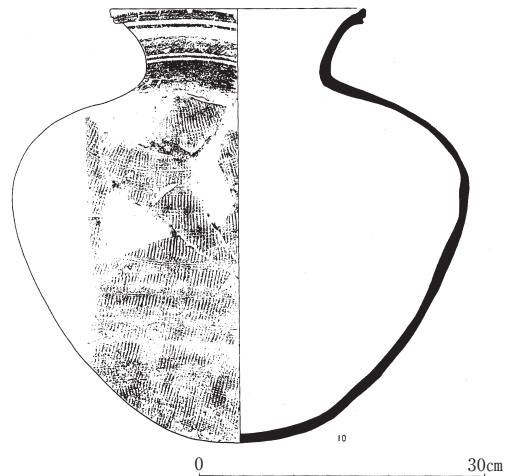
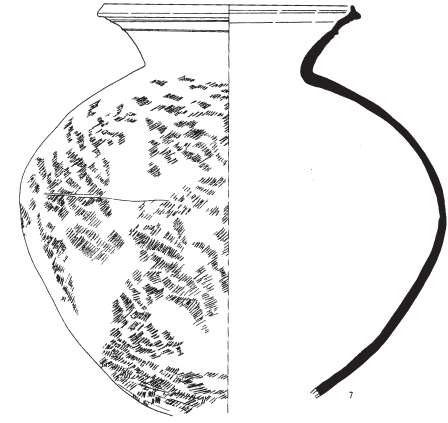
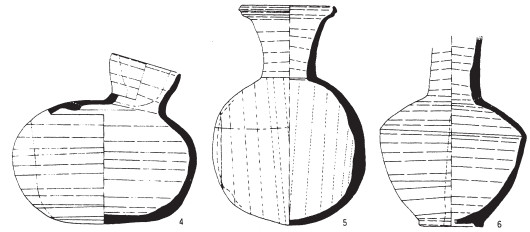
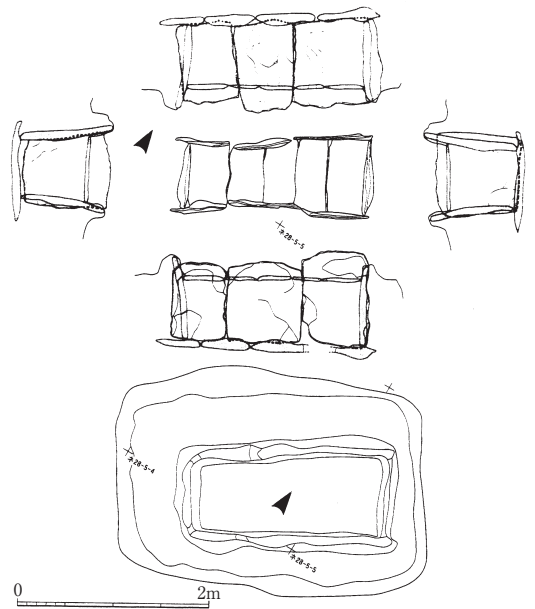
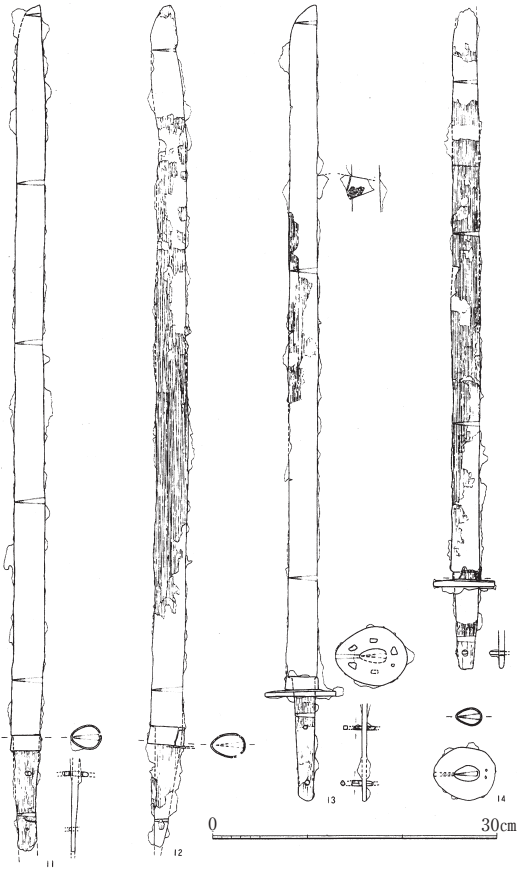
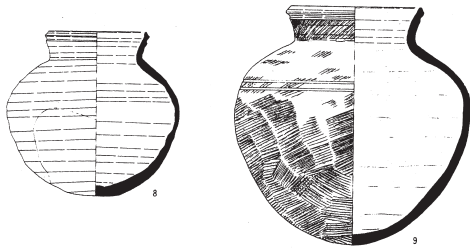
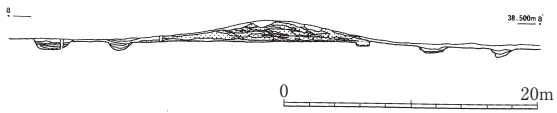
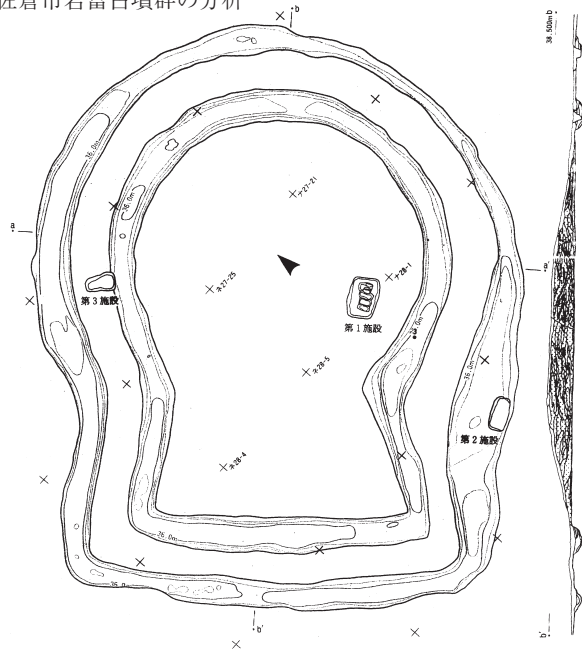


図7 野中5号墳の墳丘・石棺（第1施設）・遺物

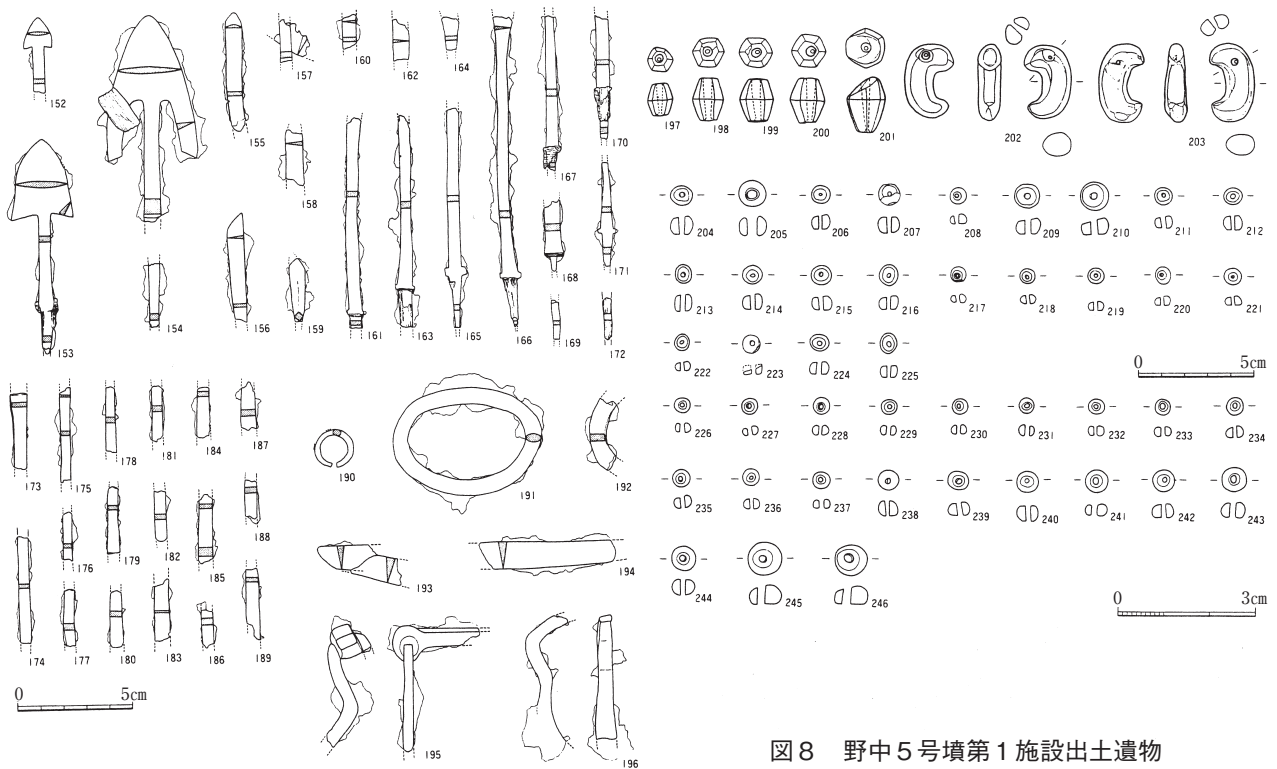


図8 野中5号墳第1施設出土遺物

の副葬について考察した滝沢誠の論考をもとに本例を検討したい（文献12）。

鉄製籠手は下腕部を保護する甲冑の付属具で、甲冑と同様古墳時代前期から副葬され、本県では前期後半に木更津市手古塚古墳の副葬例がある。滝沢によれば、全国で900か所程度を数える甲冑副葬古墳の総数に比べて籠手の副葬数は少なく、これまでの確認例は可能性のあるものを含めても40例程度のとどまっているという。籠手は形態的特徴によって、篠籠手、筒籠手、板籠手に大別されており、手古塚古墳例は筒籠手、野中5号墳例は細長い篠状の小札を横方向に綴じ付けて下腕部を一周させる篠籠手と見られる（図6-3）。また、武装埴輪に表現された籠手には、手の甲まで覆う方形の「手甲」がある（図6-4・5）。

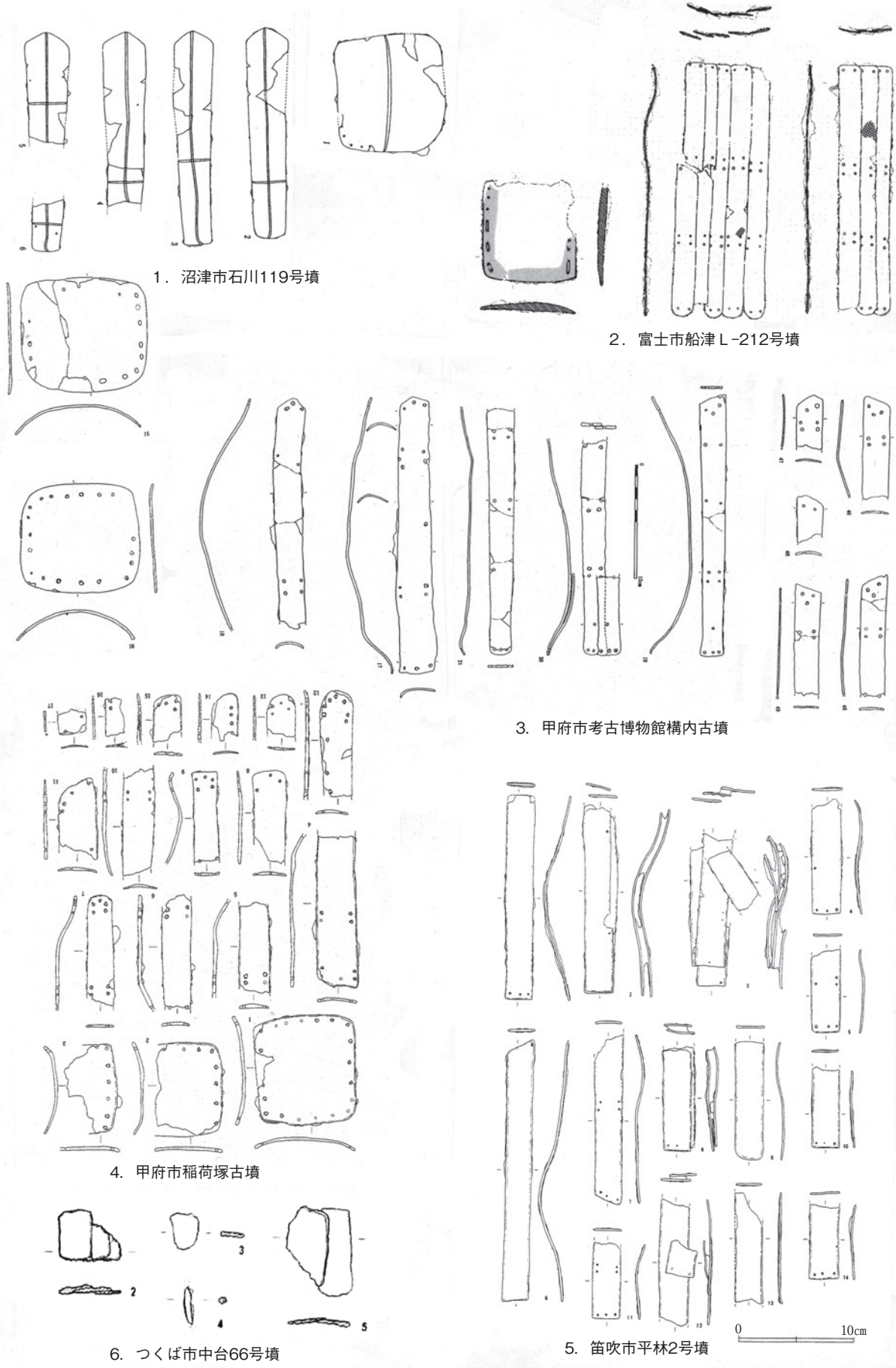
静岡県愛鷹山麓の沼津市石川119号墳と富士市船津L-212号墳に、野中5号墳と同時期の6世紀末葉～7世紀前葉の篠籠手が出土している（図10-1・2）。これらは手の甲を覆う方形板の手甲と本体を構成する長さ20～23cmの篠札から成る。これらを見ると、本来両腕の一双を成す籠手の片方が副葬されていたと見られ、小札甲の札も一切出土していない。また、この事例とほぼ同時期の副葬例が甲府盆地に3例報告されている。前掲の甲府市考古博物館構内古墳、同市稲荷塚1号墳、笛吹市平林2号墳から出土したもので、甲府市の2例では複数の手甲を確認できる（図10-3・4）。なお、いずれの例にも小札甲の存在は見られない。このように、愛鷹山麓と甲府盆地の籠手副葬例には、片腕と両腕の例があり、篠札頭部の形状にも差異が認められるが、いずれも籠手のみを副葬した可能性が高い。

野中5号墳例を見ると、方形の手甲板は認められないが、①のA～Cとした湾曲の強い小札を横8枚・縦3枚綴じ合わせると、横10～11cm・縦9.5～10cmになり、愛鷹山麓と甲府盆地の方形手甲と同じ大きさになる。両端や頭部の残るA～Cは38枚あり、おそらく手首から手の甲を覆う小札であったと推定される。上記のように、篠札の綴じ幅は優に30cmを超え、成人男性の下腕部を全周すると見られるので、埴輪表現の籠手のように半身だけ保護する形式ならば1双分あるといえるであろう。

手古塚古墳の籠手副葬例のように、鉄製甲冑が出現して間もない前期の副葬例の場合は、鉄製甲冑の流



図9 野中5号墳第1施設出土鉄製小札



1. 沼津市石川119号墳

2. 富士市船津L-212号墳

3. 甲府市考古博物館構内古墳

4. 甲府市稲荷塚古墳

5. 笛吹市平林2号墳

6. つくば市中台66号墳

図10 鉄製籠手の副葬例 (滝沢2023を引用・改図)

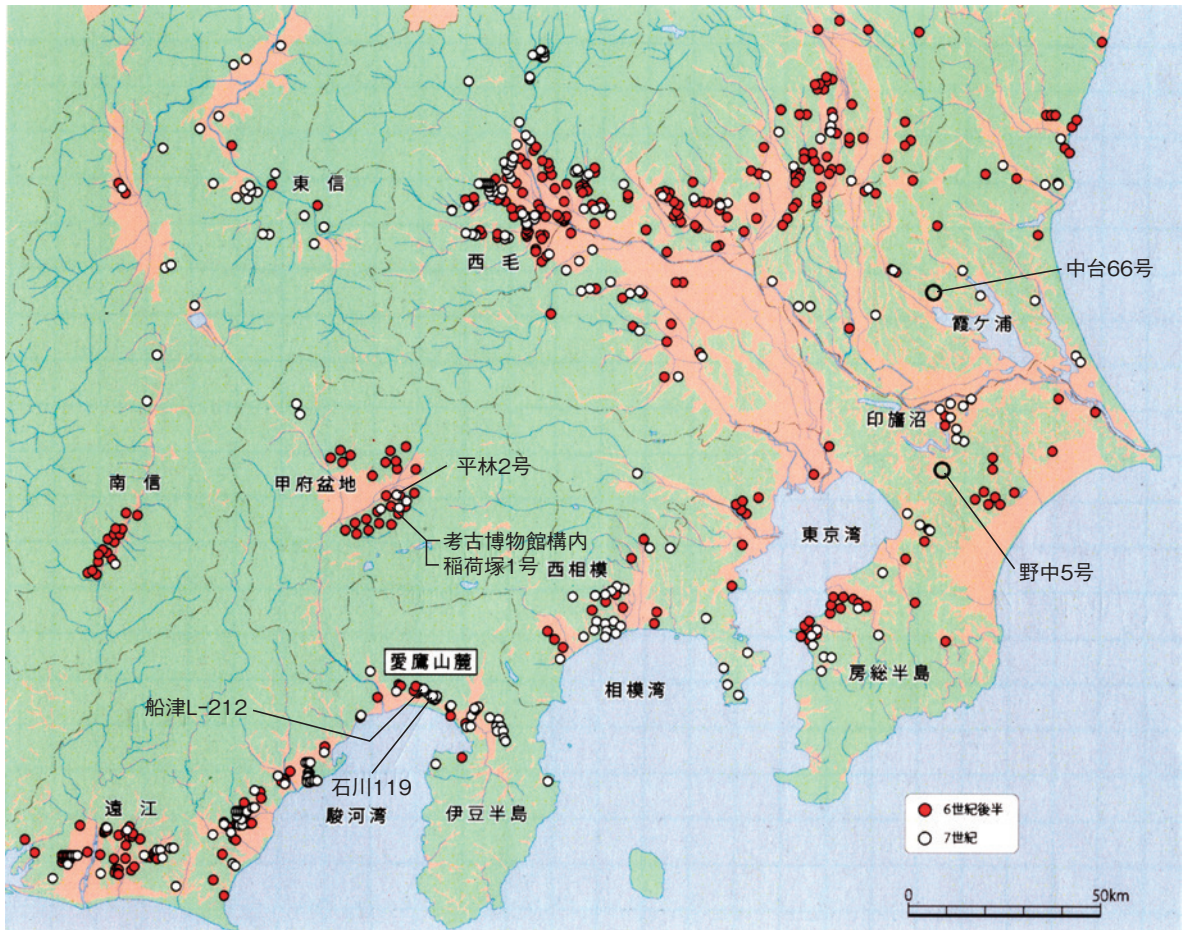


図11 6世紀後半～7世紀の馬具副葬古墳と鉄製籠手副葬例（文献12 滝沢2022に加筆）

通量が限られているため、象徴的な部分副葬が行われた可能性が高い。しかし、滝沢が指摘したように、小札甲が数多く生産され、流通量が確保されている6世紀末葉～7世紀前葉の籠手の副葬には何らかの特殊事情が背景に存在する可能性が高い。そして、本稿で最も注目したいのは、この時期の籠手副葬古墳が上記の5例に限られていたことである。本例は副葬が明らかな6例目となる。なお、内山敏行から本例のように手甲小札を伴う籠手出土例に茨城県つくば市中台66号墳があるとの教示があり、都合7例となった。

考古博物館構内古墳、稲荷塚1号墳、平林2号墳では金銅装馬具が出土し、稲荷塚1号墳では銅椀、平林2号墳には金銅製冠飾も副葬された。石川119号墳では金銅装大刀・金銅装馬具片・金銅製鈴が出土しており、いずれも地域の中核を成す古墳と考えられるが、墳丘規模は10～20m程度の円墳で、墳丘長32.6mの前方後円墳である野中5号墳が傑出している。野中5号墳では、第1施設で鉄鏃・刀子・青銅製耳環・玉類と伴に鉄製素環轡が出土した（図8）。

共通項を見出すとすれば、馬具の副葬である。滝沢は、無袖の横穴式石室の共通性に加えて、この特徴的な籠手の副葬に愛鷹山麓と甲府盆地の強い結びつきを挙げており、6世紀後半から7世紀の馬を利用した陸上交通の発達と交流が、地形的環境を生かした馬匹生産によってもたらされたことを指摘した。野中5号墳が特別な籠手副葬の輪に加わっていることは、愛鷹山麓あるいは甲府盆地から馬の供給を受けていたことを示しているのではないであろうか。また、野中5号墳と小札手甲を共有する中台66号墳は、雲母片岩の箱式石棺も共有しており、稀有な籠手副葬がさらに東進した道筋を示している。

表7 土製玉類・土製品出土状況

報告書No.	遺跡名	勾玉	管玉	小玉・丸玉	棗玉	切子玉	鐸形	紐状	ミニチュア土器	計	備考
	立山			1						1	1号墳埋施設：小玉1 漆仕上げ
Ⅲ	タルカ作	5	2	9	1	3				20	4号、7号、9号、11号、13号、19号、21号、37号、43号住居で出土し、小玉・丸玉の他切子形の玉、棗玉、管玉、勾玉がある。いずれも入念に研磨仕上げされている。
V	腰巻			27	1				1	29	2号住居の20点を最多に、6号、7号、11号、12号、15号住居で出土。褐色～黒褐色で丁寧なつくり。棗玉は11号。
Ⅸ	松向作(住居)			1					27	28	土製円盤1
	松向作(古墳)			1						1	039号墳周溝内出土 光沢有り、漆仕上げか。
X	南広	11	4	18	3		2	3	10	51	001、017、025、027、035、037D、038、050、058住居に出土例があり、017には鐸形の鈕部分の破片が2点ある。017A・027住居の土製小玉は漆仕上げが確認できる。
Ⅻ	池向(住居)			2					2	4	088にコップパン状土製品有り。
	池向(古墳)			31						31	1号墳第I施設：丸玉4・小玉24、2号墳埋葬施設：小玉1、8号墳第11施設：小玉6 すべて漆仕上げ
計		16	6	89	3	3	2	3	40	164	

(3) 飾大刀

飾大刀は、古墳時代後期から終末期の限られた期間に量産され、東日本に偏在する威儀具のひとつである。本古墳群の飾大刀は、銀象嵌文様で飾られた池向11号墳の片岩箱式石棺出土例と金銅製黄金と鳩目金具を伴う松向作060方墳出土の2例に限られる。池向11号墳は墳丘径37.6mの古墳群最大の円墳で、ほかに大刀7・鉄製弓飾金具4・鉄鏃23が伴っている。大刀の鏃に心葉文系の銀象嵌が施されているが、心葉文様はやや簡略化し変容している。心葉文系の象嵌刀装具は、後期Ⅱ段階から終末期Ⅰ段階に用いられた。心葉文は鳳凰文から派生・変形した文様で、後期Ⅰの6世紀初頭に遡る亀甲繫鳳凰文・亀甲繫花紋の象嵌円頭把頭に伴う外装具に出現し、変形・退化した例が最も多く、6世紀末葉から7世紀初頭に盛行している。また、出土地の明らかな心葉文系の象嵌刀装具をもつ大刀は宮城県から宮城県の広い範囲に分布するが、畿内の例は極めて少なく、東日本の太平洋側と群馬県に分布の中心がある。

松向作060方墳は、一辺15.6mほどの小規模墳ながら、片岩の横穴式石室を埋葬施設としており、鉄鏃59・刀子2・玉類16・須恵器17を伴う。大刀の柄頭は金銅製の金具で飾られた木製であった可能性が高い。池向11号墳は終末期Ⅰ、松向作060方墳は終末期Ⅱの本古墳群を代表する有力者として飾大刀を拝領したものである。

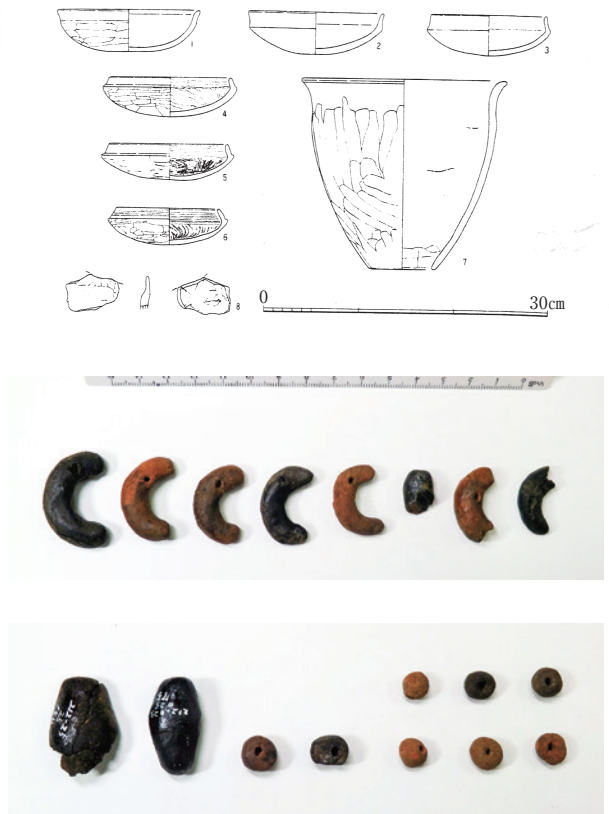
(4) 土製の玉(図11、表7)

本遺跡群で、集落と古墳から良質な土製の玉類が出土していることも注目に値する。タルカ作遺跡では後期Ⅰ～終末期Ⅱの住居跡(9棟)で土製の玉類が出土し、その種類は、勾玉・管玉・小玉(白玉)・丸玉のほか、切子玉・棗玉がある。土製の玉は、腰巻遺跡・松向作遺跡・南広遺跡・池向遺跡で出土しており、腰巻遺跡では後期Ⅱ～終末期Ⅰ、松向作遺跡は後期Ⅰ～終末期Ⅰ、南広遺跡は後期Ⅰ～後期Ⅱ、池向遺跡は後期Ⅰの住居で出土した。地点によって若干時期が異なるが、後期Ⅰが11棟、後期Ⅱが11棟、終末期Ⅰが13棟と、ほぼ一定している。最も多種・多量の土製玉類を出土した南広遺跡では、001、008B、017、025、027、035、037D、038、050、058住居の10棟に出土例があり、017には鐸形の鈕(吊り手)部分の破片が2点ある。また、025では勾玉8、棗形2、丸玉8点のまとまった玉類がすべて土製であった。037D・050では紐(ひも)状の土製品が出土している。全体の形状は分からないが、何らかの祭祀具と考

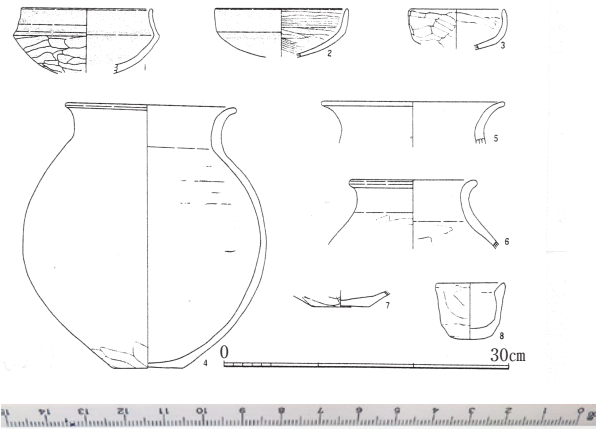
南広017A 鐸形・管玉・土器



南広025 勾玉・棗玉・小玉



南広027 管玉・小玉・土器



南広037D 紐状・棗玉・管玉・小玉



池向8号墳第11施設出土小玉



池向1号墳第1施設出土丸玉・小玉



第12 土製玉類・土製品

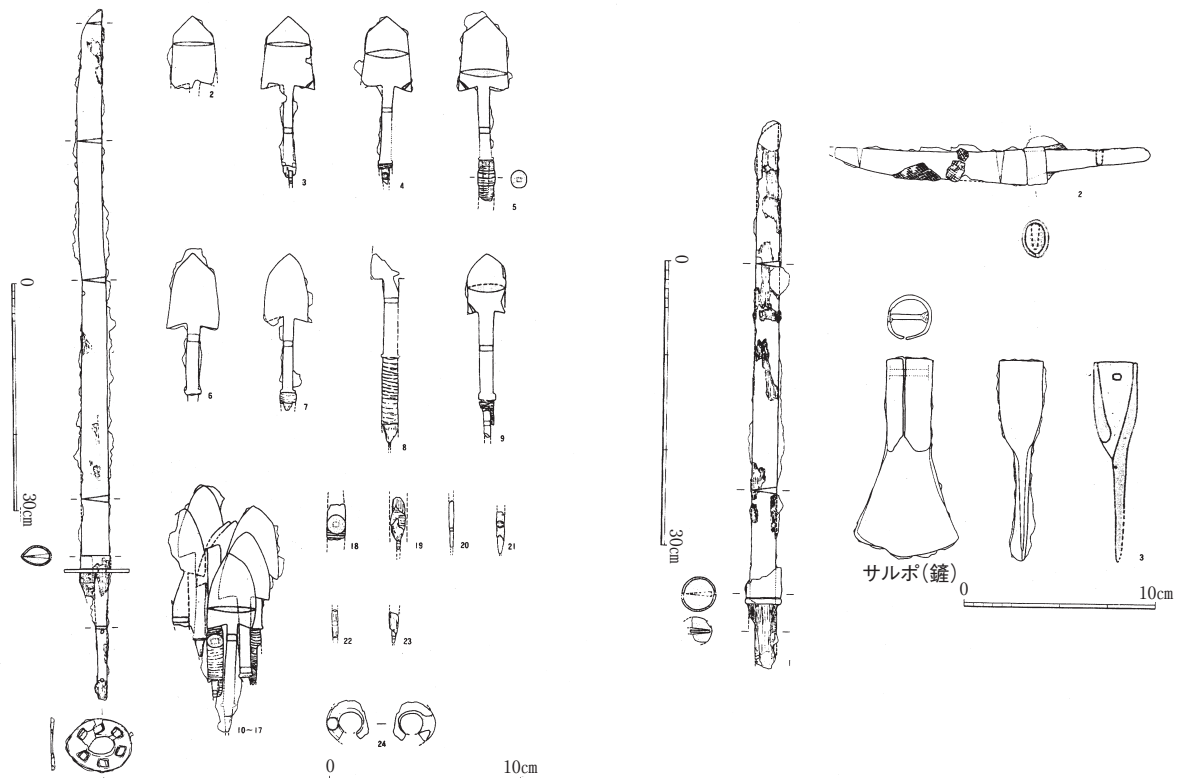


図14 栗野001第1施設(左)・第2施設(右)出土遺物

えられる。住居の規模を見ると、紐(ひも)状の土製品が出土した037D・050が一辺8mの大型住居で、後期Iと後期IIに分かれ、037Dには土製の管玉・丸玉・棗玉が出土している。次いで025が7.5m四方の後期IIの住居である。他は、4～6mの平均的な規模で、鐸形土製品を出土した017も4.5m四方の後期IIの住居である。

古墳群では、立山支群で1基(1号墳:墳丘径19.4m、後期IIの円墳)、松向作支群で1基(039号墳:径12.0m、後期IIの円墳)、池向支群で3基の古墳(1号墳:径21.4m、後期IIの円墳、2号墳:径25.8m、終末期Iの円墳、8号墳:墳丘長33.2m、終末期Iの帆立貝形前方後円墳)に計33点の土製丸玉や小玉が副葬されている。これらは光沢があり黒褐色で、一見滑石かと思間違うほど丁寧に作られている。破断面には褐色のコーティングが見られることから表面を漆仕上げしたものと見られる。池向支群の出土例は各時期の中核を成す古墳である。

これらの土製玉類を主体とする土製品は、126点あり、極めて丁寧に作られた特別な土製祭祀具と考えられる。当遺跡では、石製・琥珀製・ガラス製の玉類も出土していることから、特定のマツリや儀礼に欠くことのできないものであったといえるであろう。後期Iから終末期Iにかけて間断なく集落と古墳から出土しており、特に南広遺跡の後期IIに大型住居を中心に土製玉類や祭祀具を用いたマツリが行われたことがうかがえる。

4 岩富古墳群の被葬者像(図12・13)

本古墳群は、南関東では例のない大作31号墳の馬の埋葬例によって広く知られているが、古墳群全体の動向に改めて注目し、以下の視点で分析を試みた。

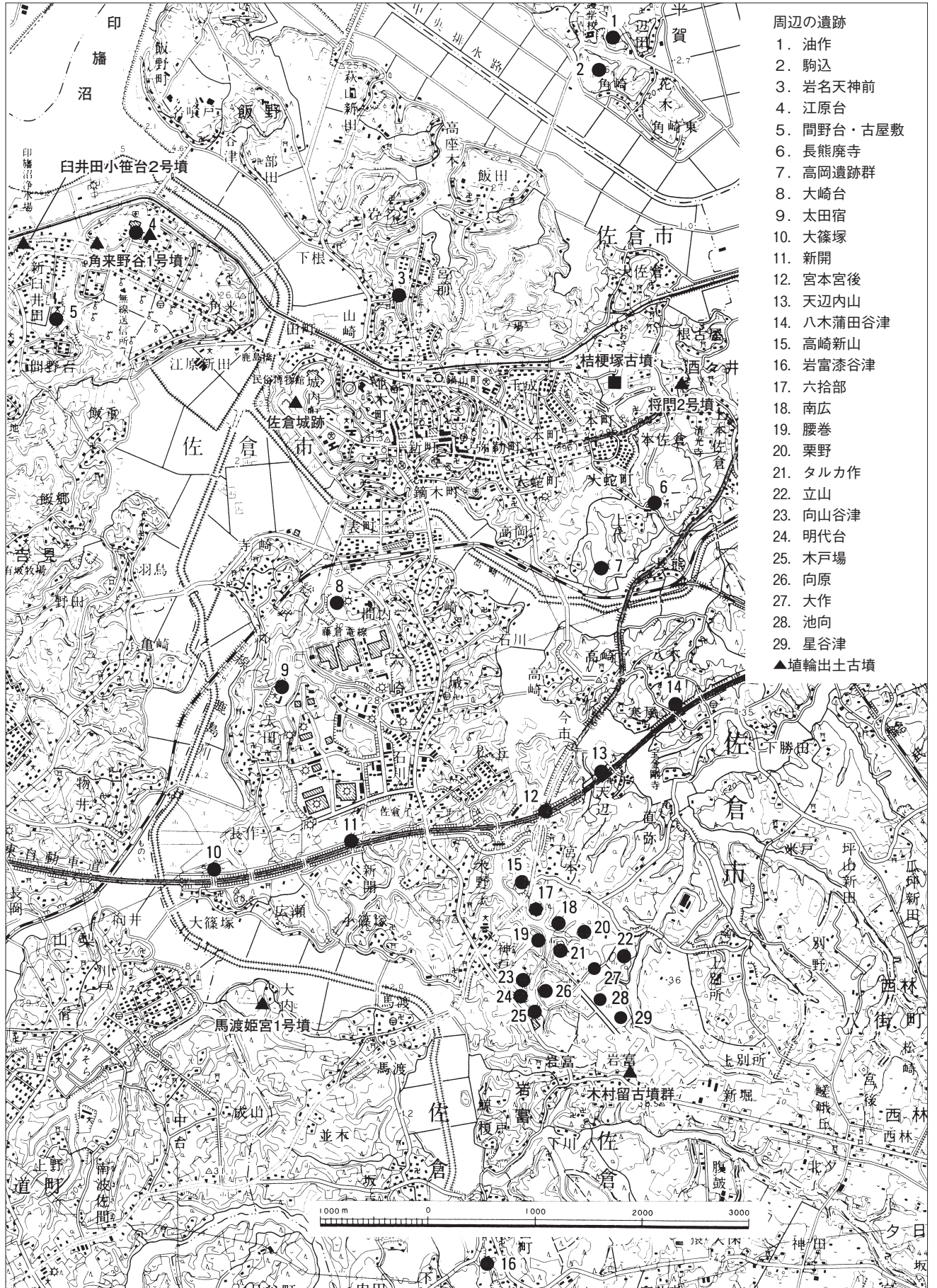


図13 岩富遺跡群と周辺の遺跡

まず、注目したのは、調査区域内で集落域と墓域がほぼ完結している点である。古墳時代中期後半から平安時代前期に至るまで、極めて安定した開発と集団運営が維持され、古墳時代後期以降は造墓層が厚く拡大している。墳丘規模に大きな格差がなく、墳丘・周溝内に多くの埋葬施設を設けるなど、均質な中堅層によって集団が維持されていたことがうかがえる。

また、樹脂加工した精巧な土製の玉類や特殊な土製品が用いられている点にも注目した。おそらく集落内で製作されたものと思われる。用途の不明な土製品も含めて、この集団独自の祭祀形態が存在したのかもしれない。古墳に埴輪を用いなかったことも、意図的なことであったと思われる。南側の隣接地には、6世紀中葉の下総型以前の埴輪をもつ木村留古墳群があり、埴輪は茨城県土浦周辺から搬入された可能性が指摘されている。西側の谷を挟んだ対岸に下総型直前の円筒・形象埴輪をめぐらした馬渡姫宮1号墳、3kmほど南には6世紀中葉の形象埴輪を出土した飯塚古墳群が存在し、岩富古墳群も埴輪を導入する環境にあったと考えられる。

それでは、外部との交流に消極的であったのか、という疑問にひとつの回答を得たのが、野中5号墳の籠手の副葬である。群集墳では小札甲の一部を副葬する例はあるが、籠手のみを副葬するという極めて特殊な埋葬行為の例に野中5号墳が該当している。その類例は6世紀末葉～7世紀前葉に6例しかなく、そのうち5例は馬匹生産と馬を利用した陸上交通に関わる愛鷹山麓と甲府盆地の例であった。大作31号墳の馬の埋葬がどのように受け継がれたのか、あるいは馬文化導入時の一過性のものであったのか、後期の岩富古墳群にはその形跡を確認することができなかったが、野中5号墳にその活動が受け継がれていたことを見出せる。野中5号墳と同時期の栗野001号墳に半島系の鉄製儀器（サルポ）が出土しているのも半島に由来する馬匹生産とその供給に関連した渡来系構成員の存在を暗示している。

また、大作31号墳1号土壇の馬は、歯の咬耗の進行状態から3歳半から4歳馬と推定され、この年齢の牡馬に見られる犬歯が歯槽内にも確認できないことから牝馬の可能性が強いという報告であった。4歳馬は後の『延喜式』にみえる牧馬の選別年齢とされており、馬の臼歯エナメル質に含まれる炭素同位体比による食性研究では、古墳時代の奈良県南郷大東遺跡や群馬県三ツ寺I・II遺跡で36ヶ月齢前後に良馬に与える雑穀給餌が行われた個体が確認されている。平安時代に編纂された『朝野群載』によれば、牧馬は父馬と多数の牝馬、牡の仔馬、責課前の牝の仔馬、高齢で不課となった牝馬で構成されていたという。父馬以外の成熟した牡馬は使役馬として出荷され、藤原宮の造営で資材運搬に用いられた馬は、性別の判明する個体はすべて牡だったという。大作31号墳の馬歯には食性分析の対象となる臼歯エナメル質が残っているようであり、動物考古学的分析によって馬の出自を解明することも可能であろう。墳丘内に葬られた被葬者の「馬養」としての職能を確認できるのかもしれない。後期初頭に遡る大作31号墳の馬の埋葬と7世紀前葉のサルポ、籠手の副葬がどのように繋がるのか、被葬者像に迫る課題である。

一方、大作31号墳に前後する古墳の鉄鏃を見ると、大作28号墳には一直線の広い切先刃をもち、外形に沿った飾り透かしのある儀仗色の強い大型鉄鏃が一束あり、大作33号墳には後期初頭の重厚な片刃と両刃長頸鏃、34号墳には中期末～後期初頭の逆刺をもつ両刃の長頸鏃が副葬されるなど、最新の武器類を入手できる集団であったことがうかがえる。また、後期後半から終末期に供えられている須恵器の大半は遠江の湖西窯から運ばれた製品である。これらの品々の搬入に岩富遺跡群の眼下に流れる鹿島川本流の水運を利用したことは明らかであろう。鹿島川は流路延長29,000mの下総台地中央部を流れる最大の河川で、中・上流域は東京湾に注ぐ都川に接近し、水源域は東京湾東岸の主要河川である村田川の分水嶺にある。

また、鹿島川は岩富遺跡群から直線距離9kmで印旛沼に注ぎ、古香取海を經由して常陸へ通じている。遺跡群は水運を利用して南北へ移動できる絶好の場所に立地していたといえる。集落と墓域は古墳時代中期後半以降に入植した人々によって営まれ、平安時代前期まで「開拓集落」を維持していた。集落の様子には周囲と一線を画するような面も見られるが、強い絆で結ばれていた所以であろう。その職能は馬文化の導入と利用に関連していると考えられ、当集団と印波の中心勢力との関係が、さらに検討すべき課題である。

謝辞 本稿作成に当たって、岩富遺跡群出土遺物の熟覧では県文化財課森宮分室の加納実氏に格別の配慮をいただいた。また、野中5号墳出土籠手の検討は内山敏行氏のご教示によるものである。記して謝意を表したい。

引用・参考文献

- 1 市原市教育委員会 2015『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ』
- 2 茨城県教育財団 1995『(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書－中台遺跡－』
- 3 植田隆司 1999「内彎楕円形鏡板轡の馬装」『龍谷史壇』第111号 龍谷大学史学会
- 4 植月 学 2021「動物考古学からみた馬匹生産と馬の利用」『馬と古代社会』八木書店
- 5 内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』Vol. 7 古代武器研究会
- 6 小野真一ほか 1976『駿河 石川古墳群 第三次発掘調査報告書』加藤学園考古学研究所
- 7 笠間良彦 1993『図録 日本の甲冑武具事典』柏書房株式会社
- 8 小林三郎・佐々木憲一編 2013『古墳から寺院へ－関東の7世紀を考える－』六一書房
- 9 白井久美子 2006「椎名崎古墳群B支群の概括」『千葉東南部ニュータウン』35－千葉市椎名崎古墳群B支群－(財)千葉県教育振興財団
- 10 白井久美子 2009「おゆみ野の古墳群」『研究連絡誌』70号 (財)千葉県教育振興財団
- 11 白石太一郎 2005『終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 12 滝沢 誠 2022「愛鷹山麓の後期古墳を考える」『愛鷹山に眠る開拓者たち』沼津市教育委員会・富士市
- 13 田中新史 2000『上総市原台の光芒』市原古墳群刊行会
- 14 千葉県企業庁 1975『公津原』
- 15 千葉県文化財センター 1975～2008『千葉東南部ニュータウン』1～40 (財)千葉県文化財センター～(財)千葉県教育振興財団
- 16 千葉県文化財センター 1978『佐倉市星谷津遺跡』
- 17 千葉県文化財センター 1983～1995『佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ～Ⅺ (財)千葉県文化財センター
- 18 千葉市史編纂委員会 1976『千葉市史 史料編1』－原始古代中世－ 千葉市
- 19 萩原恭一ほか 2014「古墳時代」『佐倉市史』考古編(本編)(資料編) 佐倉市
- 20 花谷 浩 1991「出土遺物に関する考察 馬具－日本出土鉄製鏡板付轡に関する覚え書き」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会
- 21 富士市教育委員会 1999『船津古墳群』
- 22 桃崎祐輔 2021「日本列島における馬匹と馬具の受容」『馬と古代社会』八木書店
- 23 桃崎祐輔 2021「福岡県直方市小野牟田2号横穴の補修痕跡のある兵庫鎖付内湾楕円形鏡板付轡と鞆負」『古文化談叢』第87集 九州古文化研究会
- 24 右島和夫 2004「群集墳の築造背景」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会
- 25 山口典子 2003「岩富古墳群」『千葉県の歴史 資料編2』－考古2 弥生・古墳時代－ 千葉県
- 26 山梨県教育委員会 1987『岩清水遺跡・考古博物館構内古墳』
- 27 山梨県教育委員会 1988『平林2号墳』
- 28 山梨県教育委員会 2000『稲荷塚古墳』